

主任教授からのメッセージ

整形外科に関しては骨折や人工関節などの手術を想像しやすいために力仕事であるかのような印象があり、これまで女性医師には敬遠されてきたと思います。しかし、実際には座位での繊細な手術が必要な手外科の分野や、小児整形外科などのように出産直後の新生児や幼児を対象とした細やかな治療が必要な分野も多く存在しています。現時点では男性社会となっておりますが、現在関西医大整形外科女医支援プログラムを策定しており、出産や育児をこなしながら整形外科の仕事が行えるよう、短時間勤務での優遇措置など、女性として結婚・育児・家事などを思う存分こなしながら医師としてのキャリアを積み上げていける教育体制を構築しております。「家庭での家事労働の責任が軽い男性と全く同じ扱いにすることはかえって不平等である」という認識のもと、女性にとっても働きやすい関西医大整形外科にすべく、どんどん改革を行って行く所存です。ぜひ、家庭を大事にしながらかつ立派に活躍する女性医師を目指す学生や研修医の皆様、整形外科の女性参画推進プログラムに是非とも注目して頂きたいと思っております。

○ 診療科の特徴

当大学では脊椎外科・関節外科が主流で、整形外科の全体像がつかみにくいかもしれませんが、整形外科とは、外傷・手外科・スポーツ外科・小児整形外科・腫瘍外科・リハビリ関連・リウマチ科など、全身を対象としている科です。診断に始まり、治療については、保存的治療・手術治療など多彩です。機能再建を手助けする科であり、患者様に希望をもつていただけるよう常に活動しています。手術ばかりしているような印象があるかもしれませんが、外来では、多くの保存治療、疼痛に対する神経ブロック、splint治療、リハビリ指導を行っています。患者様の機能障害を改善するために、多方面からアプローチをすることができます。すなわち、整形外科医はいろいろな形で、患者様の疼痛改善・機能改善に対して働きかけができます。

整形外科全般について基本的なことを学習した後は、より専門性を持って活動するように、sub-specialtyを獲得すべく勉強します。日本整形外科学会の女性会員数は約6%とまだ少ないですが、色々な分野で活躍している先生が多く、日本整形外科学会 男女共同参画・働き方改革委員会ホームページ(joa-danjo.jp)にアクセスいただけますと、女性の活躍の様子がうかがえるかと思っております。

○ 診療科で働く女性医師

現在当教室には、約10名の女性医師が在籍しています。常勤勤務医は5名、非常勤勤務医は4名、リハビリや、形成外科を主体として仕事をしておられる方もいます。多彩な働き方が可能であることが少しずつ周知されてきて、女性医師も増加傾向です。

▶ 職場復帰への取り組みについて

○ 研修内容

整形外科1年目は、附属病院・総合医療センターを中心に、脊椎・関節・外傷・手外科の診療について学びます。2年目からは、関連病院での一般整形外科・外傷を中心に研修をします。その後、整形外科専門医を取得して4年目からは大学に戻って、より専門性を目指した研修を始めます。希望者は大学院での研究を開始する場合があります。

復職については個別に対応いたしますので、興味のある方はご連絡ください。

○ 女性医師キャリア形成支援担当医師からのメッセージ

まだ、当教室における女性医師は少ないため、多彩なロールモデルを示すことはできませんが、日本整形外科学会のホームページを通じて、多くの女性医師の活躍を知ることができます。整形外科自体が多分野での活躍ができる科であるので、産休などで一時現場を離れても、個人の制約を考慮した flexible な職場復帰を考えることが可能です。昔の、「長時間・重労働」のイメージが強く、誤解しておられる方も多いと思います。小児から高齢者まで快適な生活ができるようにお手伝いのできる、明るい建設的な科です。

まずは、教科書的な整形外科のイメージとは別に、整形医局を訪ね、実際の医局の雰囲気と、外来での整形外科一般を肌で感じていただけるとよいと思います。

➤ 復帰した医師の声

体験談（A 先生）

私は 13 年目の整形外科医で、現在 9 歳と 6 歳の 2 人の子供がいます。

1 人目の時には大学病院の女性支援制度を利用し、産後 6 か月で短時間勤務正職員として附属病院に復帰しました。病院併設の保育所に預けており、完全母乳で育てていたため、仕事の合間を見て保育所と病院を往復し授乳していました。手術などで授乳時間が取れない場合には冷凍母乳を保育所に預けていました。

2 人目の時は萱島生野病院への出向中であり、こちらでも病院併設の保育所を利用しました。産後 5 か月でフルタイムで復帰しました。

両病院とも併設の保育所があり大変お世話になりました。子供が発熱した時などには働く女性医師としては大変困りますが、小児科の先生に診ていただいた上で病児保育で預かってもらえたため助かりました。また、整形外科の手術では放射線を使う機会が多いことも問題となります。妊娠中の胎児へのリスクを考えると、透視装置を多く使う手術に入る機会は減ってしまいます。しかし、理解ある上司に恵まれて御配慮いただいて仕事を続けることができ、大変感謝しております。

整形外科は早期から手術手技の習得を求められる科であり、子供が小さい間は想像以上に大変かと思えます。しかし、執刀させてもらえるチャンスも早くから訪れるので若い頃からやりがいを感じやすい科でもあります。女性医師の皆さんは、仕事と育児と家庭のバランスを上手に取ってがんばってください。



手術室にて「指の骨折の治療—細かい作業は得意！」



外来診療「痛いお膝、しっかりリハビリしようね」

● 講座ホームページ 関西医科大学 整形外科学講座 <https://www7.kmu.ac.jp/kansai-ortho/>